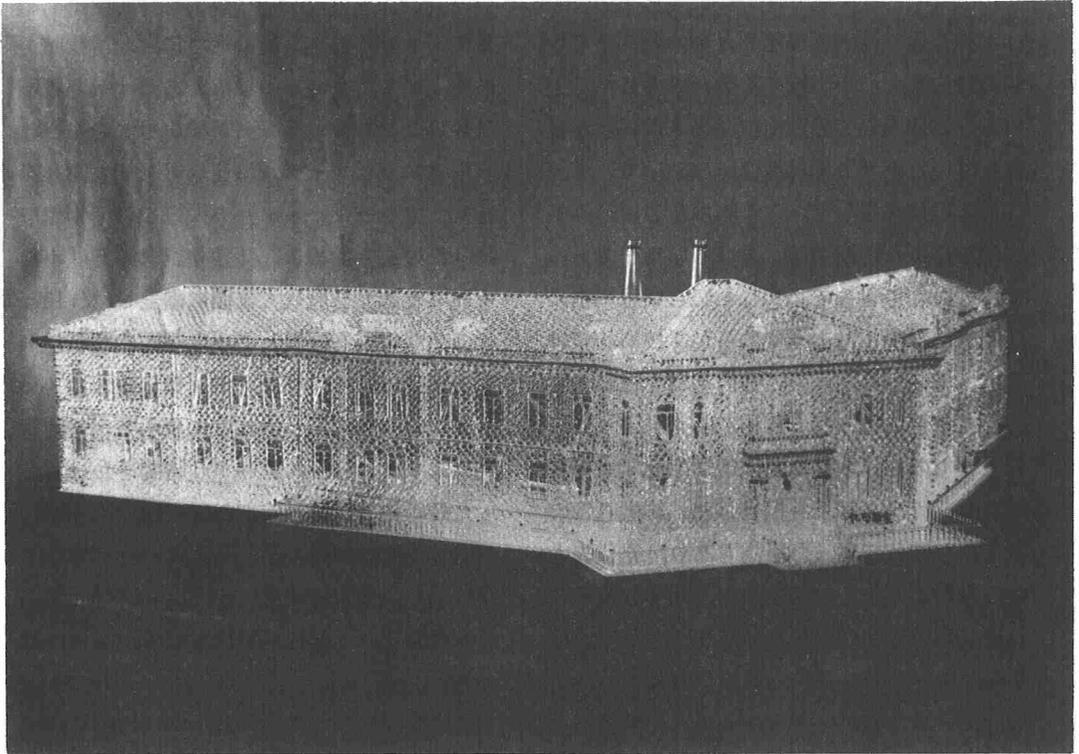


報 廣

東京大学理学部



目 次

表紙の説明

大野貢氏と化学教室ガラスモデル……不破 敬一郎… 1

PIサブセンターの改修……富 永 健… 3

物理・化学系科学におけるカナダ

女性学者の実態……Gabrielle Donnay… 5

メンタルトレーニング……岩 澤 康 裕… 6

逆転磁場ピンチ RPUTE-1計画

について……宮 本 健 郎… 7

<学部消息>……… 9

表紙の説明

大野貢氏と化学教室ガラスモデル

不破 敬一郎 (化学)

大野貢^{みつぎ}氏は、大正15年6月栃木県那須郡馬^ば頭^{とう}町で生れた。小学校卒業後たゞちに単身上京し、本郷湯島で義理の叔父高木茂郎氏が経営していたガラス器具製作所において、ガラス細工の修業をした。六年間に及ぶ住込みの徒弟奉公のこの期間は、きびしい毎日であって、大野氏にとって必ずしも楽しい思い出の期間ではなかったようであるが、技術的精神的に、その後の同氏の力強い基礎を作る上で、極めて重要であった。昭和22年4月より35年12月までの13年余りの間、理学部化学教室に勤務し、ガラス細工を担当した。終戦直後の不自由な時代であった所為もあり、君代夫人との結婚までのこの期間中も、化学教室に住込み(現分光化学センター0007号室)で、仕事をした。抜群の技術と職人氣質により、研究面で大きな貢献を行うと共に、化学教室の人々と将来に及ぶ貴重な人間関係が出来上った。

昭和36年、来日中に知り合った物理学者A.カドウェル教授のさそいにより、米国カンサス州マンハッタン市にあるカンサス州立大学物理教室に転勤、やがて米国市民権を取得し、二年前より同大学化学教室に移り、現在に及んでいる。後世に何か残したいという願望から約十年前より、大学勤務の余暇を使って、著名建造物のガラスモデルの作制を開始した。

故アイゼンハッサー大統領はカンサス州出

身で、マンハッタン市の近くに記念博物館がある。アメリカ海軍の象徴である「帆前戦艦USSコンスティチューション号」を、パイレックスガラスモデルに仕立て(60×53×25cm)、アイゼンハッサー夫人宛この博物館に贈ったのを手始めに、「独立記念館」「ホワイトハウス」を歴代大統領に贈呈し、又、1976年の200年祭を記念して「米国会議事堂」を米国民に贈り、ワシントンDCのスミスニアン博物館に展示されるに及んで、一躍有名になった。今回、延べ700時間をかけて作った最新作「化学教室旧館」(表紙写真参照、100×100×34cm)を、三部にわけて自ら空路持参し、東京で組立てを完了。贈呈式が去る6月19日、化学科講堂において、盛大に行われた。

渡米後間もなくの昭和37年春、当時私が在住したボストンに大野氏が訪ねて来られた。御承知の方も多いと思うが、ハーバードの大学博物館に有名なガラス細工の展示室がある。ボヘミア出身のブラシュカ親子がドレスデンにある工房で、ハーバード大学植物学教室の依頼により50年間(1887年～1936年)を費して作制した「ガラスの花」がそれである。

1000点に近い実物同様の草木の標本は、始めは教育の目的で作られたのであるが、余りにも見事で、現在ではボストン観光のアトラクションの一つになっている。当然のこと乍

ら、私は大野氏をそこに連れて行った。二部屋に処狭く展示された標本を、大野氏は物も云わずに見て廻った。その様子は今思えば、狐犬が獲物をかき廻るような姿であった。建物の外に出て、大野氏はさりげなく『不破さん、あれは僕にも出来るよ。』と言った。私が何と答えたかおぼえていないが、少くも彼の言葉の重大性をその時はわからず、20年経った今しみじみ感じている。

カンサス州マンハッタンにおいて、大野氏の才能と人柄に引かれて、有力な友人が現れるのに時間はかゝらなかつた。前述のカドウェル先生の他に、化学科のフェイトリー、マロン、クルー教授等との親交は緊密であるし、又、カンサス州選出のドール上院議員夫妻も熱心な支持者で、特にドール夫人は、レーガン政権の現運輸大臣であり、過日の大統領訪日の際に、大野氏の作品「白鷺城」をお土産にするよう努力したが、残念乍らこれは実現しなかつた。

日本においては、故水島三一郎先生が、大野貢氏の最も熱心な応援者であつた。昭和54年4月、先生の御推薦によって「吉川英治文化賞」が与えられた。人に知られない処で、地味にしかも真実に努力した人を対象とするこの賞は、吉川英治氏の生い立ちと人柄に由来するものの由である。齒に衣を着せない大野氏は、水島先生に『昔はお話も出来なかつたのに、何故自分をこのように推薦されるのですか?』と質問した。先生はややつまづから、『君とつき合っている僕の弟子達は皆

優秀なので、多分君も優秀な人に違いないと思つた。』と答へられた。いかにも先生らしいお言葉であるが、これはキッカケのお話で、その後は極めて親密且内面的な文通とおつき合いが続いた。苦しみのみ多かつた日本より、第二の故郷の米国により多くの愛着を持つていた大野氏の心を多少なごませ、ガラスの自重に堪え得る最大限の大型モデル「白鷺城」を3年前に完成させ、それが米国民から日本国民に贈られる意図で作られたものであつた等々、いづれもこのような背景によつたことであつた。「化学教室旧館モデル」は1.3m四方のガラスケースに収められ、化学科図書館に安置された。「白鷺城」はその数倍の大きさであり、現在カンサス州立大学学生会館の中央ホールに展示されてあり、大野氏はこのモデルが日本の然るべき場所に寄贈されることを希望しているのであるが、移動させるのも容易ではないし、又、カンサス州立大学当局も手離し難いであろうし、将来何処に落着くか目下の処、未定である。

今回の「化学教室旧館モデル」の作成と贈呈にあたっては、計画が3年前より始り、高橋武美主任を中心とした期成会が設置され、150余名の有志の御参同が得られて、実現の運びとなつたことを附記すると共に、化学科図書館に来られて、実物を一見されることをおすすめする。

以上

R I サブセンターの改修

富 永 健 (化学)

設置以来20余年を経て老朽化の目立ちはじめた理学部のR Iサブセンター本室がこのほど改修され、目下整備の進んでいる化学館・理4号館地区の中庭の風景に新たな彩りをそえることになった。まず、改修の実現のため御盡力いただいた学部長はじめ理学部事務部、本部事務局の関係者の方々に、理学部放射線管理委員会ならびにR I施設使用者に代って厚く御礼申し上げたい。こゝでは、今回の改修のあらましとともに、理学部のR Iサブセンターの沿革や現状についても簡単に紹介し、この機会に共同利用施設としてのサブセンターに対する一般の御理解を得たいと思う。

理学部のR Iサブセンター（正確には、理学部放射性同位元素研究室）は、昭和32年定められた放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律に則って、R I等の使用・管理の体制を整えるため本学に生れた最初の部局サブセンターで昭和36年春完成した。そして、昭和46年に理学部

2号館にサブセンターの分室が、また3号館にも分室が設けられ、2号館の分室はその後拡張されて現在に至っている。理学部にはこれら非密封R Iの使用施設のほかに、密封線源のみを用いる施設が1、4号館、化学館にある。理学部の建物がキャンパス各所に分散しているため、サブセンターを中心にこのように分室を設けて利用の便をはかっている。

R Iサブセンター本室は主として物理・化学系の研究者に利用され、また生物系の研究者も各分室で使用承認されていないR Iを用いる場合本室を利用している。今回の改修は、室内では床面張替・壁面補修塗装や、フード・流しなどの撤去・交換のほか、新たに汚染検査室を設置し、管理室に窓を設け、また数年来屋上に仮設していた地殻化学実験施設のプレハブ実験室を撤去して屋根や外壁の改修も行われ、周囲の赤れんがと同系の色に外装も一新された。さらに排水の貯留槽や排気



化学新館から望むサブセンター本室の全景

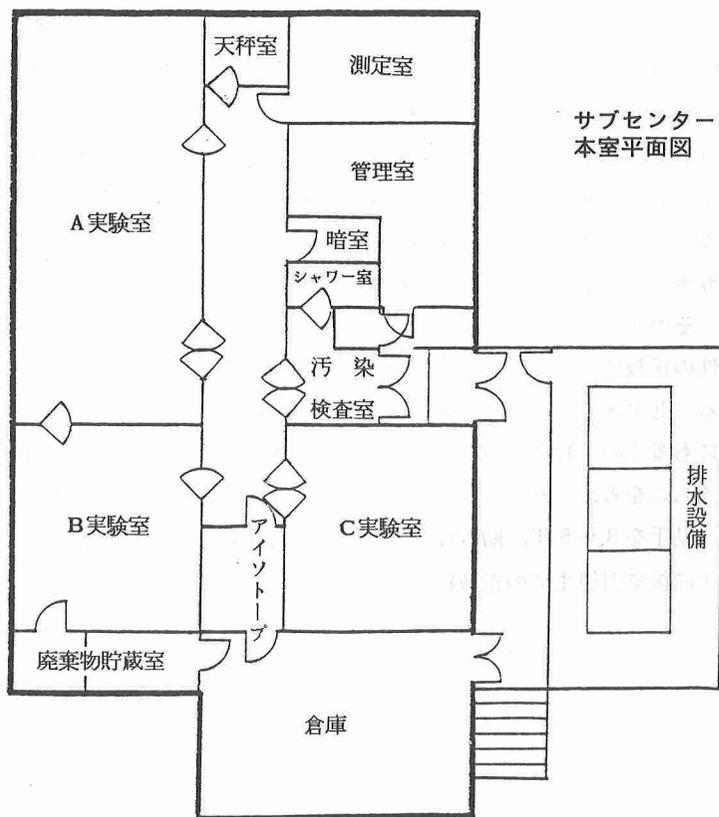
系についても補修が行われた。予算の関係でフードなどの設備や配線・配管までは更新できなかったが、当面「老朽化」のイメージを一掃し得たのは喜ばしいことである。

理学部の放射線管理体制は、学部長の下に放射線管理委員会があり、R I等の管理・使用・障害防止計画などの重要事項を審議し、放射線管理の実務は放射線管理室（助手1，技官1）が事務部と協力して担当している。放射線管理室はサブセンター本室に置かれていて、学部内のR Iの購入・使用・保管・廃棄や汚染検査・放射線測定などの定期的測定，記録等の検査・保存，緊急時・事故の際の連絡調整などR Iに関するさまざまな業務を行っている。理学部におけるR Iの購入件数は昨年度で260件に達し，この10年間にほぼ倍増している。また，理学部の放射線取扱者の数はX線を含めると約390名（約50研究室）にのぼるが，各取扱者は研究室の責任者，担当者を通じて管理

室と密に連絡している。

R Iサブセンターの運営費は，本室・分室をあわせて年間約530万円に達するが，このうち中央からのR I施設経費約100万円と理学部共通経費からの約120万円とでまかなわれるのは約40%に過ぎず，利用者の負担は60%に及んでいる（さらに予備費の補助を受けても利用者負担は40%をこえる）。これらの経費は，通常の研究費とは異なり，法令に従ってR Iを使用するため不可欠なものであり，利用者負担にも限度があると思われるので，運営費のやりくりは今後ますます頭の痛い問題である。厳しい財政事情の下ではあるがこの点については是非一層の御配慮をお願いしたいところである。

R Iサブセンターの今後の課題としては，このような運営費の問題とともに，新しく設置される遺伝子実験施設との関係や，理3号館分室の改修の実現がまずさしせまった問題であるが，長期的



には理学部の将来計画（建築計画）の中でサブセンター本室と分室が統合される形で新営されることが望ましいと思われる。化学新館5階のオフィ

スからサブセンター本室を見おろしながら、これらの課題に頭をかかえる毎日である。

物理，化学系科学におけるカナダ女性学者の実態

McGill 大学教授 Gabrielle Donnay

上に記した問題点に対する回答は、少なくともアカデミックな職業に関する限り残念ながら“あまり満足すべき状態にない”とならざるをえない。一方生命科学や生化学のような境界領域の分野では、多くの女性が受け入れられて成功している。例えば、私の所属する McGill 大学（Montreal）では、生化学教室の主任は、女性であり、Toronto 大学でも同様である。しかしながら McGill 大の化学，物理，地質などの教室では、私が唯一の教授会メンバーである（私の専門は、結晶学であり、これらの分野の外とみなされているが）。私の知る限り、私は、McGill 大学の創立された1830年以來、これらの分野で、唯一人の女性の正教授である。しかも、McGill 大が例外ではない。今年末に発行予定のカナダ女性地質学者名簿から統計をとってみる。カナダの大学には、全部で44の地質学教室があり、そのすべてを調べて解ったことは、44教室で女性の正教授は、たった二人だけだということである。北アメリカの大学を眺めてみると、どの教室にも多くの正教授がいる。典型的な出世コースなるものを考えてみると、所謂ポストドクで2～3年、助手を3～5年、助教授を5～7年、そして40才前後で引退までの正教授として

のキャリアが始まる。しかも正教授の法的定年がないのであるから、例えば地質学の分野等では、正教授の中で女性の占める割合は、1%以下となる。

それでは、我々女性は、この惨めな状態を如何に変えようとしているのだろうか？

我々は、多くの女子学生を地質学に進学させるよう努力している。今では30～40人のクラスに2～3人、ではなく少なくとも1/3ないし1/2は、女子学生で占められるようになってきている。このような変化は、ここ10年程の間に起った。上に述べた名簿の目的は、充分な訓練を受け豊富な経験を持ちアカデミックな地位に相応しい女性の存在を広く知らしめるところにある。最も大切なことは、アカデミックな職業における採用と昇進も、他のすべての職業と全く同様に、専門に対する資質のみを基準としておこなわれるべきだ、という趣旨を広く認めさせようと、われわれが努力している点である。物理や化学の分野で女性が男性より劣っているという科学的根拠はなにもない。

この男性社会を、両性に平等な機会を与えるような世界に変えていきましょう！

（訳 田賀井）

メンタルトレーニング

岩澤康裕(化学)

本年4月より田丸名誉教授(現理科大教授)の後を受けて横浜国大より戻って日も浅く、最近の東大の理解や経験はとも充分ではありませんが、メンタルトレーニングと東大の教育について述べ、編集委員会からの割当字数を埋めさせて頂きたいと思えます。

オリンピックが終るとお決まりの如く本番における日本選手の弱さ(勿論感動的な立派な成績もありますが)が話題となります。案の定、先日のTV番組の中でこの事が取り上げられ体育心理学的な分析がなされておりました。LAオリンピックの出場選手へのアンケートで運動トレーニング以外にメンタルトレーニングをしている者の割合は約25%であります。金・銀メダルを獲得した者では実に8割以上の選手がメンタルトレーニングをしているとの事です。メンタルトレーニングは探究心や向上心を常に持たせると共に本番での実力発揮に導く効果があります。日本選手の多くはこの面のトレーニングが不十分であるといえます。一流選手を見てみますと、目標達成或いは成功の確率が30%、不成功70%位の時に優れた結果を生じるという事です。一方、並の選手はこの割合が50-50%の時良い成績を残します。つまり、一流なほど不安と緊張を抱きつつもこれを上回る探究心と向上心により大きなレベルアップが計れると読み取れます。

研究、教育に話を移しますと、この数字がそのまま当てはまるとは根拠がありませんが結構似ているのではないのでしょうか。

共通一次の輪切り型偏差値を見るまでもなく、東大合格者は一流の資質を持っています(少なくとも親はそう思い、本人はそう信じ、教官はそう期待する)。大学受験制度は多年多くのさまざまな問題や批判を抱えて来ましたが、一貫して東大のやるべき事は、高校カリキュラムの表面的な勉強では合格30%、不合格70%の質的に難しい入試問題を世に発表していくことではないでしょうか。東大は底辺を上げるのではなく頂上をより高くする義務があります。受験は選抜行事ではありますが、これを通して意図的積極的にレベルアップ教育を図る事が大切なように思われます。

研究室における院生の研究で、例えば横浜国立大では60-70%の成功が予想されるテーマを与えると良好な結果が生まれますが、東大の置かれた立場と使命を考えますと、ただ論文数を増やす類いの仕事より(場合により必要であります)むしろ、研究指針、核心、不連続性を生み出し、院生に不安、緊張を持たせつつ意欲的研究心を揺り起すテーマという事になろうかと思えます。研究の発展のみならず次世代の人材や研究者を育てるにはやはり30%~70%則が当てはまるように思われます。

割当字数もほぼ終り、全く尻切れ蜻蛉で筆を置かねばなりません。また何も運動におけるメンタルトレーニングを持出すまでもなく、在り来たりの結論となっているかも知れませんが、或いは異論がおりかと思えます。忌憚のない御批判、御意見を頂ければ幸いです。

逆転磁場ピンチ REPUTE — 1 計画について

宮本 健 郎 (物理)

理学部・物理学教室と工学部・原子力工学科の関係者の共同提案による逆転磁場ピンチ計画 REPUTE — 1 (Reversed Field Pinch, University of Tokyo, Experiment) の設備予算が昭和58年度に認められ、ようやく装置建設が完了し、昭和

59年7月より実験が開始される運びになった。この7月17日にはささやかながら披露式典を行なった。写真はREPUTE—1装置本体を撮ったものである (図1参照)。

ふりかえてみると昭和57年に、当時の田丸総

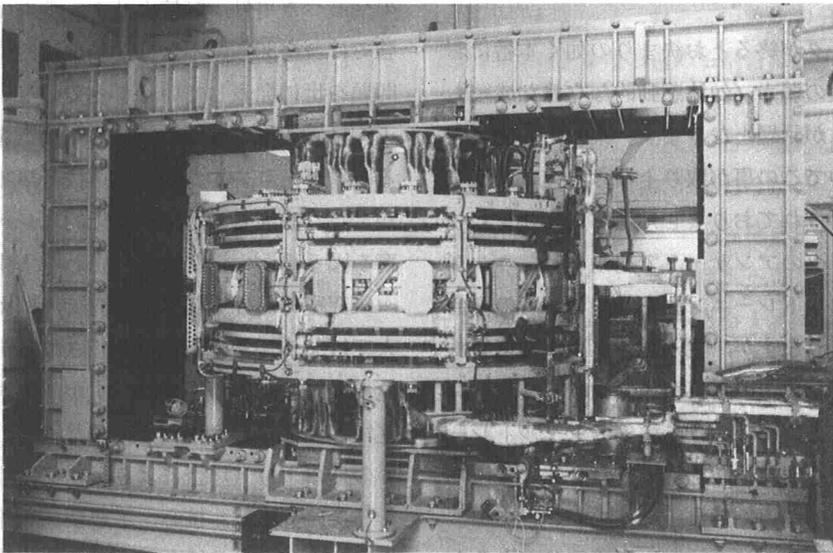


図1 REPUTE — 1 装置本体

長特別補佐が「核融合問題に関する懇談会」を主催され、東京大学における核融合の研究・教育の進め方について検討が行なわれ、大学として一本化した形で進めることになった。理学部、工学部間に「核融合研究連絡委員会」が設けられ、具体化に関する打合せが行なわれた。装置は工学部9号館 (総合試験所) 東側増築部分、並びに、これに隣接して新設された地下電源室に設置された。これまで比較的順調に進んできたのは、ひとえに江上理学部長、堀川工学部長、有馬評議員、国井 (工) 元評議員、猪瀬 (工) 評議員を始め多くの先生方の御指導と御協力の賜物と関係者一同、厚く感謝を申し上げる次第である。まだ小規模では

あるが東京大学に本格的なプラズマ核融合実験装置が新設され、ほっとすると同時に、これからの責任の重大を感じている次第である。

逆転磁場ピンチは通称 RFP (Reversed Field Pinch の略) と呼ばれ、トーラス型閉じ込め方式の一種である。トカマクと同様トーラス状のプラズマに電流 (最大 400 KA) を流し、それによって作られるポロイダル磁場 (図2参照) とトロイダル・コイルによって作られるトロイダル磁場で合成してできる螺旋状磁場 (ヘリカル磁場) によって閉じ込められる。しかし両者の間には磁場配位に大きな差がある。第一は、トカマクにおいてはトロイダル磁場がポロイダル磁場より1桁程

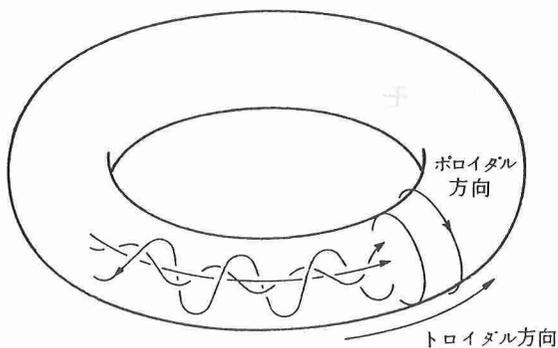


図2 逆転磁場ピンチ (RFP) の磁力線

トロイダル磁場とポロイダル磁場との合成により螺旋状の磁力線となる。

度大きいものに対して、RFPの場合は同程度である。したがってトロイダル磁場が小さくても大きなプラズマ電流を流すことができる。第二にRFPではトロイダル磁場の向きがプラズマ断面の周辺部と中心部と逆転している。このため磁力線の捻れの度合いが大きい。これを磁気シア (shear) が強いという。強いシアの磁場は、圧力の比較的高い高温プラズマ (高ベータ・プラズマ) でも安定に閉じ込めることができる。すなわち、RFPの特徴をまとめると次のようになる。i) プラズマ閉じ込めに必要な外部磁場が小さくてすむので、装置の経済性がよい。ii) 大きなプラズマで電流を流すことができるので、オーム加熱だけで炉心プラズマの温度まで加熱できる可能性がある。このようにRFPは多くの炉工学的利点を持ち経済性のよい核融合炉の可能性を秘めている。

一方プラズマ物理の観点からもRFPプラズマ

は興味深い点が多い。RFP磁場配位は強力線の再結合を含む緩和過程を経てたどりつくエネルギー最小の状態であることがJ.B.Taylorによって示された。当初はこうして出来たRFP配位も、磁場の古典拡散によってきまる時間内に消滅すると予想されていた。しかし最近の実験によれば、いわゆる「ダイナモ機構」と呼ばれるトロイダル磁束の自己発生機構が見られ、RFP配位はプラズマ電流が続く限り維持されることが観測され、多くの関心を集めている。

このように多くの利点を持ちながら閉込めのよい高温プラズマの実験的研究が難かしく、RFP研究はトカマク程進んでいない。REPUTE-1計画はRFPについての実験データを集積することによって世界のこの分野に貢献しようとするものである。表1に世界の主なRFP装置のパラメータを示す。REPUTE-1の設計性能は他の装置に十分匹敵するものであり、最近の研究成果をとり入れた新しい特徴をそなえている。

主な研究課題として次のものを予定している。

- i) 逆転磁場ピンチ配位形成の最適化条件
- ii) シェル効果に依存しないプラズマ平衡制御
- iii) 逆転磁場ピンチ配位維持機構 (ダイナモ機構)
- iv) プラズマ・パラメータ、閉じ込め時間の比例則
- v) ヘリカル磁場を加えた OHTe モード
- vi) 逆転磁場ピンチ放電電流の準定常駆動

昭和59年度中に、各種計測器を準備し本格的な実験を行う予定である。

表1 世界の主なRFP装置のパラメータ

装置名 (研究所)	主半径 R (M)	小半径 a (M)	プラズマ電流 I_p (MA)	放電時間 τ_{dis} (ms)
TPE-1 RM (電総研)	0.5	0.1	0.13	1.0
ETA-BETA II (Padova Univ)	0.65	0.125	0.2	1.5
HBTX-1 A (Culham)	0.8	0.26	0.4	5.0
ZT 40M (Los Alamos)	1.14	0.2	0.4	20
OHTe (GAT)	1.24	0.18	0.4	5.0
REPUTE-1 (東大)	0.82	0.2	0.4*	40*
STP-3 M (名大プラズマ研)	0.5	0.09	0.5*	10*

(*印は目標値)

＜ 学部 消息 ＞

教 授 会 メ モ

7月18日（水）定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認
 (2) 人事異動等報告
 (3) 昭和59年度奨励研究員の受入れについて
 (4) 昭和59年度民間等との共同研究について
 (5) 人事委員会報告
 (6) 会計委員会報告
 (7) 60年問題小委員会報告
 (8) そ の 他

(次回以降開催予定は、9月12日（水）、10月17日（水）、11月21日（水）、
 12月19日（水）いずれも13時30分より、理学部4号館3階会議室（1320号
 室です。)

人 事 異 動

(講師以上)

所属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
地 質	教 授	速 水 格	59. 7. 1	昇 任	総合資料館助教授から
生 化	教 授	高 橋 健 治	59. 7. 16	配 置 換	京大霊長類研究所教授か ら
物 理	教 授	山 本 祐 靖	59. 7. 16	昇 任	助教授から
物 理	教 授	一 丸 節 夫	59. 7. 16	昇 任	〃
鉱 物	教 授	武 田 弘	59. 7. 16	昇 任	〃
化 学	講 師	卷 出 義 紘	59. 7. 16	昇 任	助手から
動 物	助 教 授	佐 藤 真 彦	59. 8. 16	昇 任	講師から
地 物	助 教 授	GELLER, ROBERT JAMES	59. 8. 16	採 用	

(助 手)

数 学	助 手	坪 井 俊	59. 6. 26	復 職	
数 学	助 手	小 澤 真	59. 7. 1	昇 任	阪大・理講師へ
物 理	助 手	木 村 芳 文	59. 7. 1	採 用	
化 学	助 手	佐 藤 春 雄	59. 7. 1	休職更新	59. 9. 6
化 学	助 手	清 水 真	59. 7. 15	辞 職	理化学研究所へ
化 学	助 手	村 上 正 治	59. 7. 16	採 用	

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
鉱物	助手	森 寛志	59. 7. 16	採用	
植物	助手	原山 重明	59. 8. 31	辞職	

(職員)

物理	事務官	角田 照子	59. 6. 1	転任	高エ研より
植物園 (日光分園)	技官	平井 一則	59. 7. 1	配置換	情報・事務官より
事務部	事務官	高橋 誠	59. 7. 1	配置換	事務部庶務掛より事務局人事課へ
事務部	事務官	能代 久幸	59. 7. 1	採用	(庶務掛)
天文	事務官	児玉 典子	59. 8. 1	配置換	事務部人事掛より
事務部	事務官	古泉 弘志	59. 8. 1	配置換	用度掛より人事掛へ
事務部	用務員	大木 ふみ子	59. 8. 1	配置換	天文より事務部用度掛へ

理学博士の学位授与者

[昭和59年4月23日付(4名)]

専門課程	氏名	論文題目
論文博士	下村 俊	或る種の非線形常微分方程式及びV一型のPainlevé'方程式の不確定特異点の近傍での解析的な積分について
同	草薙 隆夫	C57BL/6マウスにおけるPalatal slitの組織学および遺伝学的研究
同	中村 泰男	赤潮の生物地球化学的研究
同	豊島 陽子	ダイニンのサブユニット構造

[昭和59年5月21日付(4名)]

論文博士	千葉 公二	電子散漫散乱によるマグネタイトの低温結晶構造の研究
植物学	峰雪 芳宣	ハウライシダ原糸体における核の細胞内定位と微小管に関する研究
数 学	裕 文夫	ある種のアーベル多様体及び代数曲面の巾の上の代数的サイクルについて
論文博士	新沢 和裕	反跳硫黄原子と有機化合物との反応に関する研究

[昭和59年6月25日付(2名)]

論文博士	飯田 秀利	酵母の細胞分裂周期および熱ショック抵抗性突然変異株を用いた細胞増殖制御機構の研究
同	篠原 俊二郎	非円形断面トカマクTNT-Aのプラズマ形状制御の研究

[昭和59年7月23日付(8名)]

専門課程	氏名	論文題目
天文学	相馬 充	新しい月の暦ELP 2000を用いた1955~1980年の星食観測結果の解析
地球物理学	金子 郁雄	フィリピン海中深層水の構造
物理学	近松 護	低次元磁性体における圧力効果
論文博士	野本 茂樹	鳥類における運動時の体温調節機構
同	肥沼 昭	シンジュサン蛹休眠覚醒に対する脳的作用
同	松井 良夫	高分解能1MV電子顕微鏡の製作及びその応用
同	石渡 光正	結合陽子核スピン系における二重共鳴飽和回復
同	小杉 健郎	太陽フレアからの電波放射の異方性について

海外渡航者

(6月) (追加分)

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
物理	教授	山崎 敏光	ドイツ連邦共和国	6.30~10.15	物理実験学に関する調査・研究のため

(7月)

数学	助手	深谷 賢治	フランス ドイツ連邦共和国	7.7~7.31	「Riemann多様体の収束とその応用」研究集会に出席するため
情報	助教授	川合 慧	アメリカ合衆国	7.15~7.23	コンピュータグラフィックスのシステム調査及び研究のため
情報	教授	國井 利泰	アメリカ合衆国	7.21~7.29	コンピュータグラフィックスと相互作用技術に関する第11回会議(SI66RAPH'84)に出席のため
物理	助手	池畑 誠一郎	アメリカ合衆国	7.29~8.18	「多量の不純物添加と金属-絶縁体転移」国際会議及び第17回半導体国際会議出席のため
物理	教授	小柴 昌俊	ドイツ民主共和国 スイス	7.16~8.14	第22回高エネルギー物理学国際会議出席及び国際協同実験に関する研究打ち合せのため
物理	教授	有馬 朗人	連合王国 ドイツ連邦共和国	7.21~8.6	第4回原子核の構造と反応のクラスターの様相に関する国際会議及び素粒子と原子核第10回国際会議出席のため
物理	助手	林 幹治	カナダ ノルウェー	7.15~10.2	「カスポオーロラのプラズマ特性及び夜側オーロラとの関連」共同研究及び「カナダ地域の磁気圏入射粒子が広域変動励起に及ぼす影響」への調査参加のため

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
物理	助手	大塚 洋一	アメリカ合衆国	7.29 ~ 8.12	「多量の不純物を含む半導体と金属—絶縁体転に関する会議」及び「第17回半導体物理学国際会議」出席のため
地物	助手	尹 宗煥	大韓民国	7.1 ~ 7.15	第9次国内外韓国科学技術者総合学術大会出席のため
人類	助手	長谷川 真理子	ケニヤ共和国	7.20 ~ 7.29	第10回国際霊長類学会出席のため
化学	助教授	宮本 健	アメリカ合衆国	7.29 ~ 8.5	第23回国際錯塩会議出席のため
人類	助教授	西田 利貞	ケニア, ルワンダ タンザニア	7.21 ~ 8.6	第10回国際霊長類学会出席及びブルワンダ, タンザニアの野生動物研究所視察のため
化学	教授	不破 敬一郎	ソビエト連邦	7.1 ~ 7.11	第2回日ソ分析化学シンポジウム出席及び無機・分析化学に関する研究打ち合せのため
素粒子	助手	竹下 徹	ドイツ連邦共和国	7.23 ^{61.} 7.22	国際協同実験電子・陽電子衝突実験のため
植物	助手	佐藤 直樹	ドイツ連邦共和国 フランス スイス	7.9 ~ 7.26	「第6回植物脂質の構造・機能および代謝に関する国際シンポジウム」に参加のため
化学	助手	小杉 信博	アメリカ合衆国	7.14 ~ 7.28	第3回国際広域X線吸収微細構造(E X A F S)会議出席及び物理化学に関する研究打ち合せのため
人類	教授	尾本 恵市	中華人民共和国	7.17 ~ 7.25	人類集団遺伝学に関する研究打ち合せのため
地物研	教授	小口 高	カナダ ノルウェー	7.19 ~ 9.21	共同研究「カスポオーロラのプラズマ特性及び夜側オーロラとの関連」の実施及び「カナダ地域の磁気圏入射粒子が広域変動励起に及ぼす影響」への現地参加のため
地理	助教授	米倉 伸之	ニュージーランド自治領 フランス海外領	7.9 ~ 9.5	「中部太平洋における海面変動とテクトニクス」調査参加のため
物理	助教授	永宮 正治	アメリカ合衆国 ドイツ連邦共和国	7.19 ~ 8.20	重イオン衝突の研究及び素粒子と原子核第10回国際会議出席のため
地物	助手	鈴木 保典	アメリカ合衆国	7.15 ~ 8.1	第8回世界地震工学会議に出席及び地震学に関する研究打ち合せのため
情報	助教授	前川 守	アメリカ合衆国	7.4 ~ 7.14	情報科学に関する研究打ち合せのため
生化	助教授	猪飼 篤	連合王国	7.28 ~ 8.8	第8回国際生物物理学会出席のため
天文	助手	柴橋 博資	ベルギー	7.7 ~ 7.26	「第25回リエージュ国際天体物理学コロキウム」に出席及び天体物理学に関する研究連絡のため
植物園	教授	岩槻 邦男	連合王国	7.28 ~ 8.9	タイ植物誌研究集会出席のため
中間子	助教授	永嶺 謙忠	カナダ	7.3 ~ 7.13	TRIUMF 実験審査委員会出席のため

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
物理	助手	相原博昭	アメリカ合衆国	7.15～9.29	日米科学技術協力事業の一環として「電子・陽電子衝突型加速器による新粒子検出実験」に参加のため
物理	教授	和田昭允	連 合 王 国 ス イ ス	7.26～8.12	第8回国際生物物理学学会議出席及び分子生物物理に関する研究出席のため
地物	助手	松井孝典	メ キ シ コ	7.28～9.1	隕石学会出席及び隕石の大気突入及び衝突時の生成物の現地採集と分析の調査（予備調査）のため
物理	助手	陶山 明	連 合 王 国 ス イ ス	7.24～8.13	第8回国際生物物理学学会議出席及び生物物理学に関する研究連絡のため
物理	教授	上村 洸	アメリカ合衆国	7.29～8.12	第17回半導体物理学国際会議及び金属・非金属転移国際会議出席のため
情報	助教授	佐藤雅彦	アメリカ合衆国	7.17～12.16	情報科学の研究のため
物理	助教授	若林健之	連 合 王 国	7.28～8.11	第8回国際生物物理学学会及び蛋白折りたたみワークショップ（EMBO）出席のため

(8 月)

物理	助教授	小林俊一	ドイツ連邦共和国	8.13～9.2	第17回低温物理学国際会議及び不純金属中の局在と相互作用に関する国際会議出席のため
物理	助手	小森文夫	ドイツ連邦共和国	8.9～9.6	第17回低温物理学国際会議及び乱れた金属における局在・相互作用効果と伝導現象に関する国際会議出席のため
物理	助手	野崎光昭	ス イ ス	8.1～8.28	国際協同実験電子・陽電子衝突実験のため
物理	助手	岩佐 泉	ドイツ連邦共和国	8.9～8.24	第17回低温物理国際会議出席および固体物理学に関する研究打合せのため
化学	教授	大木道則	オーストラリア ニューージーランド シンガポール	8.12～8.28	第7回有機物理化学国際会議出席及び有機化学の研究連絡のため
物理	教授	宮本健郎	ブ ラ ジ ル	8.3～8.20	プラズマ・核融合に関する日本—ブラジルシンポジウム出席及びプラズマ物理学に関する研究打合せのため
人類	助手	小林裕美	インドネシア	8.10～9.9	放射性炭素年代測定技術指導のため
物理	教授	藤井忠男	アメリカ合衆国	8.2～8.15	電子・陽電子衝突型加速器による新粒子検出実験のため
鉱物	講師	田賀井篤平	ドイツ連邦共和国	8.9～11.15	国際結晶学会出席及び結晶学の研究連絡のため
素粒子	助手	小林富雄	ス イ ス	8.1～60. 3.24	e^+e^- 相互衝突装置「LEP」における万能型測定装置「OPAL」建設のための調査研究のため

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
地質	教授	久城育夫	ソビエト連邦	8. 3 ~ 8.12	第27回万国地質学会議出席のため
物理	教授	橋本英典	デンマーク	8.18 ~ 8.29	第16回国際理論及び応用力学会議出席のため
植物園	教授	岩槻邦男	中華人民共和国	8.12 ~ 9. 5	「高等植物の日本・中国・ヒマラヤ要素における分化」国際共同研究のため
素粒子	助手	川本辰男	スイス	8.16 ~ 8.15	国際協同実験電子・陽電子衝突実験のため
物理	助手	三明康郎	アメリカ合衆国	8. 3 ~ 8.22	高エネルギー重イオン衝突実験のための研究打ち合せのため
中間子	助手	久野良孝	カナダ	8.20 ~ 8.14	大強度中間子・反陽子ビームによる原子核・物性に関する調査研究のため
物理	助手	桑田真	アメリカ合衆国	8. 4 ~ 8.19	ルミネッセンス国際会議出席及び物理学に関する研究連絡のため
地物研	教授	飯島健	アメリカ合衆国	8. 4 ~ 8.12	磁気圏物理学に関するチャップマン会議出席のため
物理	助教授	神部勉	ドイツ連邦共和国 デンマーク	8.17 ~ 8.31	第16回理論応用力学国際会議出席及び流体力学に関する研究打ち合せのため
地殻	助教授	脇田宏	中華人民共和国	8.25 ~ 9.15	地球化学地震予知研究交流のため
物理	助教授	釜江常好	アメリカ合衆国	8.10 ~ 8.25	電子・陽電子衝突型加速器による新粒子検出実験のため
植物	技官	黒澤幸子	中華人民共和国	8.12 ~ 9. 5	「高等植物の日本・中国・ヒマラヤ要素における分化」国際共同研究のため
生化	助手	飯哲夫	アメリカ合衆国	8.16 ~ 8.26	「植物病の分子的基礎」に関する国際会議出席及び分子生物学に関する研究連絡のため
地理	教授	鈴木秀夫	フランス、フィンランド、ドイツ連邦共和国、オーストリア、ハンガリー	8.19 ~ 9. 1	第25回国際地理学会議出席及び近隣諸国の地形観察のため
化学	教授	富永健	アメリカ合衆国	8.22 ~ 9. 7	アメリカ化学会第188年会出席及び放射化学に関する研究連絡のため
地物研	助教授	國分征	アイスランド	8.18 ~ 9.17	アイスランドにおけるオーロラ現象の多点観測のため
生化	教授	高橋健治	チェコスロバキア	8.18 ~ 8.27	ヨーロッパ生化学連合専門研究会議出席のため
数学	教授	藤田宏	オーストラリア シンガポール	8.21 ~ 9. 4	第5次数学教育の国際コンgres出席及び応用数学に関する研究連絡のため
化学	教授	向山光昭	大韓民国	8.20 ~ 8.21	第5回アジア医薬植物香料会議出席のため

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
化学	教授	向山光昭	ドイツ連邦共和国, スイス, スウェーデン, ノールウェー	8.24 ~ 9.20	第5回有機合成化学国際会議及び不斉有機合成ノーベル会議出席及び有機合成化学に関する研究打合せのため
化学	助教授	岡崎廉治	ドイツ連邦共和国	8.25 ~ 9.20	有機硫黄国際シンポジウム出席及び有機化学に関する研究連絡のため
生化	助手	大隅一政	スイス ドイツ連邦共和国	8.11 ~ 8.25	第13回国際結晶学連合総会出席及び回折結晶学に関する研究打合せのため
物理	教授	井野正三	スウェーデン	8.6 ~ 8.17	第6回国際薄膜学会出席及び表面物理学に関する研究打合せのため
物理	助手	青木秀夫	フランス ドイツ連邦共和国 連合王国	8.22 ~ 9.22	局在, 相互作用及び輸送現象国際会議出席及び物理学に関する研究連絡のため
植物園	助手	邑田仁台	台湾	8.7 ~ 9.18	台湾高地産マメ科植物調査のため
人類	助手	長谷川真理子	タンザニア	8.14 ~ 11.17	「ピグミーチンパンジーの適応戦略と進化方向」にかかわる野生チンパンジーの調査のため
中間子	助手	西山樟生	スイス	8.4 ~ 11.29	負ミュオンビームを用いた実験研究のため
情報	助教授	前川守	シンガポール	8.19 ~ 9.6	第10回ベリー・ラージ・データベース国際会議出席及び情報科学に関する研究打合せのため
物理	助手	石井克哉	デンマーク ドイツ連邦共和国	8.14 ~ 9.1	第16回国際理論応用力学会議出席及び流体物理学に関する研究連絡のため
鉱物	助手	山中高光	スウェーデン ドイツ連邦共和国	8.8 ~ 8.25	第13回国際結晶学連合会議出席及び結晶学に関する研究打合せのため
物理	教授	井野正三	オーストラリア	8.25 ~ 9.1	第3回固体薄膜・表面国際学会出席のため
地物研	教授	福島直	ドイツ連邦共和国 イタリア	8.25 ~ 9.13	国際地球電磁気学・超高層大気物理学協会執行委員会出席および地球磁気学の研究連絡のため
植物園	助教授	加藤雅啓	インドネシア シンガポール タイ	8.30 ~ 9.6	植物園視察及び植物野外調査のため
地質	教授	久城育夫	アイスランド	8.13 ~ 8.19	アイスランドの地質学研究者と地質調査方法等について協議打合せのため
地物研	助教授	小川利紘	ギリシャ	8.31 ~ 9.16	国際オゾン・シンポジウム出席のため
地物研	助手	岩上直幹	ギリシャ	8.31 ~ 9.14	国際オゾン・シンポジウム出席のため

外国人客員研究員

所属	受入れ教官	国籍	氏名	現職	研究期間	備考
臨海	木下 教授	アメリカ合衆国	オーブライ Aubrey ゴープマン Gorbman	ワシントン 大学教授	59.9.1 ~ 12.15	J S P S
植物園	岩槻 教授	大韓民国	リー ウ チュル 愚 喆	江原大学校 副教授	59.9.1 ~ 60.8.30	韓国政府教授 海外派遣研究 費

毎月 1 日は
 「省エネルギー」
 の日です。

◎いつも泥棒がねらっている（盗難注意）！
 本郷構内は泥棒天国といわれています。いたるところで
 泥棒（盗難）の被害にあっています。あなたのちょっとした
 注意で被害をくいとめられます。
 ～最近被害続出～

あなたです！

火事を出すのも

防ぐのも

編集：

松野太郎（地物）	内線	4299
佐佐木行美（化学）		4359
田賀井篤平（鉱物）		4544
尾本恵市（人類）		4482
矢崎紘一（物理）		4123
